

288回 サロン9 条例会報告 2017・2・21 参加者 17名  
テーマ「ヨーロッパはどうなっていくのか?・・ドイツ、フランスを中心に」  
話題提供 安藤彰浩さん（ドイツ研究者・翻訳家）

イギリスのEU離脱は世界の人々を驚かせ、現在脱EUを掲げる民族主義の新興右派勢力の台頭がヨーロッパの政治を揺るがせています。「アメリカ第一」を叫ぶアメリカのトランプ大統領の出現が益々この右派勢力を勢いづけ、私たちを更に不安に陥れている今、歴史的背景と今後についてドイツ研究者の安藤さんに話していただきました。

ヨーロッパの統合は1952年、「欧州石炭鉄鋼共同体」の設立に始まりました。石炭と鉄鋼生産という重要産業の共同管理を目的とした共同体は、統一自由市場の創設を目的とした経済共同体を経て、政治経済全般の協力関係を基礎とする「一つのヨーロッパを目指す」EU（ヨーロッパ連合）に発展していきました。EUは、人の自由な移動、多民族多文化共生を理念とし、人種、民族による迫害のない、自由と民主主義を共通の価値とする共同体として創られたのです。そのような高い理念で創られたEUに対して、当初から反EUの動きがありました。そもそもEUの政策決定が一般市民から遠いところでなされているという感覚が市民にはあり、また、経済格差の大きい東欧からの移民が流入して、各国で生活環境が急変し、また、リーマンショックやギリシャ財政危機に端を発したユーロ危機で、EUに対する不信感が強まったのです。

イギリスは1973年に、主に統一市場への参入という経済的な関心から参加していて法律の共有とか政治的な統合には懐疑的でした。特に国民をEU離脱に傾かせたのは、東欧の人たちが大量にイギリスに移住してきた移民問題でした。医療費無料など、福祉が充実していた社会が、大量の移民流入によってそれがスムーズに機能しなくなるという状況も生まれ、人々の中に不満がたまっていきました。

ドイツにとってのヨーロッパの統合は、ナチスの過激な人種差別的ナショナリズムと対極にあるヒューマニズムを重んじる共存共栄の道でした。また、ドイツ通貨「マルク」を放棄し、統一通貨ユーロの導入によって安定した経済の発展を維持することができるようになったのです。しかし、他のユーロ圏の財政危機に瀕した国々の救済のために、自分たちが犠牲になることに不満を感じる「通貨ナショナリズム」が生まれました。また、移民の急増が自分たちの権利を侵害しかねない存在であるとみなし、難民救済に熱心なドイツ政府やEUに対して不信感を強めています。そうした中、新興の右派勢力AfD（ドイツのための選択肢）が反イスラム感情に訴え、移民難民の制限を求め、政府の寛容政策を非難する大衆迎合的な主張で、勢力を拡大しています。

フランスは積極的に移民を受け入れてきた歴史をもち、国民の約四分の一が非フランスの出自を持つといわれています。しかし、70年以降、経済情勢悪化で、職につけない移民の若者の急増、治安の悪化、一部の若者へのイスラム教原理主義の影響などがイスラム過激派のテロ活動の背景となっています。パリの風刺新聞「シャリル・エブドー」襲撃事

件をはじめ、様々なテロ事件を背景に、極右「国民戦線」は反イスラム感情に訴える反移民のポピリズムによって政権を脅かす勢力になりつつあります。

EUの出発点は、20世紀の二つの大戦争は、国民国家の覇権争いの帰結であったという共通認識でした。民族的自己主張であるナショナリズムはそのEUの目的とは相いれないものです。しかし多くの国民が、自分たちはエリートによってEUという超国家的なプロジェクトによって差別されていると感じています。極右勢力は、自国第一主義を掲げ、EUに反対し、難民受け入れを拒否し、移民排斥を訴えることで、疎外感を覚える市民のアイデンティティにアピールすることで勢力を拡大しています。

最後に安藤さんは、EUを壊してしまう排外的なナショナリズムではなく連帯と共同、疎外されていると感じている移民を社会に統合し、格差をなくしていくこと、「知らない」で情緒的な言葉だけに流されないよう、事実を伝えていくことがいま求められている——とむすばれました。

そのあと、参加者が質問や感想を述べました。

まず、イスラムに対する風刺によって引き起こされ、連続テロにみまわれたフランスのメディアについて質問がありました。——フランスは公共メディアであっても記者や解説者は独立性が強く、多様性はある。だが、公共メディアに対しては”Main Stream”だと拒否感も強い。「シャルル・エブドー」に対しては、銃撃後、連帯デモが多数起こり、「言論の自由を守る」という伝統は破壊されていない——と安藤さんは説明されました。

そのほかに、「今の混乱は世界の流れのターニングポイントなのではないか。ヨーロッパで起こっていることがすぐに日本でも起こると思う。以前のように社会主義、共産主義のような思想が出てこず、右寄りに流れてしまっているのは残念だ。」「現在は、大きい声で言った者勝ちになってしまい、『本当はどうか？』と疑ってみることもせず、『自分以外の人のことを考えるのは悪だ』という考え方がはびこっている。どこかで本当はどうかを考え、言うことが必要。詩や芸術など、表現者がもっと真実を追求する活動をしてほしい。哲学者は哲学を平らな言葉で語ってほしい。」「最近国連で採択された宣言『平和的生存権』は、スペインのNGOがく平和に対する人権規定があれば戦争を止められたのでは・・・と動き始めたもので、その宣言には日本国憲法の前文『全世界の国民が、平和のうちに生存する権利を有する』が参考にされた。という記事が紹介され、暗い話題の中で、勇気と感動を得た。」などの意見が出されました。

難しいテーマでしたが、ヨーロッパ統合の理念やその問題点などを学ぶ良い機会でした。